

# 宮本百合子『築地河岸』『二人いるとき』

——既婚女性と反戦——

岩 淵 (倉田) 宏 子

はじめに

日本女子大学ゆかりの作家宮本百合子は、一五年戦争下において一貫してファシズムに抵抗し反戦小説や評論を書き続け、「千万人に対するただ一人」(本多秋五)の道を歩いたことで知られている。戦時下では、最愛の夫宮本顕治を獄に繋かれ、自身も度重なる検挙・投獄・執筆禁止などの迫害に遭い、両親の死をいずれも獄中で迎える。しかし、一九三七(昭和一二)年秋に筆名を「中條」から「宮本」に変え<sup>(1)</sup>、獄中非転向の政治犯の妻を名乗ることにより不屈な抵抗の姿勢を示す。そのため、一九四一(昭和一六)年一月九日、太平洋戦争勃発の翌日に文学者でただ一人検挙され、翌年、獄中で熱射病にかかって昏倒し、危うく一命を取り止めるという苛酷な状況が続くが、屈せずにファシズムへの抵抗を貫き、この厳冬の時代に人および作家としての百合子は真に独自の存在になったと評価される。

こうした生き方を貫いた百合子の作品には、反戦の主張が込められていないものはないと言っても過言ではないが、戦時下の女性たちに向かって、どのような反戦メッセージを伝えたのだろうか。未

婚女性に対するメッセージについては、拙稿「宮本百合子『鏡の月の月』『雪の後』『播州平野』——戦争ファシズムと女性性<sup>(2)</sup>」において若い女性にとって火急かつ最大の問題とされた結婚をめぐって検証した。本稿では、『築地河岸』『二人いるとき』を取り上げ、既婚女性へのメッセージを読み解きたいと思う。

## 一 戦時下女性政策

作品分析に入る前に、昭和戦前の女性をめぐる社会状況および戦時下女性政策をみておきたい<sup>(3)</sup>。

一九二九(昭和四)年一〇月のニューヨークの株式暴落に端を発した大恐慌は、翌年から日本に昭和恐慌を巻き起こし、女性のあり方に大きな影響を与えた。紡績業は壊滅的打撃を受け女工は離職を余儀なくされた。加えて大冷害も発生し農業恐慌にも発展し、農村では娘の身売りが相次いだ。その結果、都市では、芸娼妓・酌婦・女給になるものが増え、他方、デパート店員・電話交換手・バスの車掌・美容師などの職業婦人も増加した。低コストと性的魅力ゆえの増加という面ももっていたという。

一九三一(昭和六)年の満州事変以降、次第に戦時色が濃くなっ

てゆく状況下で、一九三七年に日中戦争、一九四一年に太平洋戦争が勃発する。いずれの国でも戦争が起ると、人的資源確保のために国策結婚宣伝の時代を迎え、母性ファシズムが吹き荒れると言われているが、日本では、早くは、一九二七年（昭和二）年五月に産婆を組織する大日本産婆会が設立する。翌年五月、ドイツに倣い「母の日」を制定し、日常生活のなかで母親崇拜を植え付けることに国民を導く。一九三二年九月に満州事変が起り、翌年、大日本国防婦人会を先駆けとして庶民女性の戦争協力が進む。一九三七年七月、日中戦争が始まると、進歩的・文化的エリート女性たちの大多数が戦時体制に巻き込まれてゆく。同年八月、国民精神総動員運動を閣議決定し、国民精神総動員中央連盟に愛国婦人会・大日本国防婦人会・大日本連合婦人会が参加した。同連盟の調査委員会は「家庭報国三綱領・実践十三項目」を公表し、家庭を通じて女性に戦争協力をさせる政策を図り、日本基督教婦人矯風会の久布白落実や婦選獲得同盟の市川房枝なども、調査委員に就任する。一九三八（昭和一三）年一月、厚生省が設置され、人口増殖政策とむすびついた国民の体力向上策が図られ、保健婦の育成に力が注がれた。同時に、満一三歳未満の児童を養育する貧困な母ないしは祖母に生活・養育・生業・医療の扶助を行うという「母子保護法」が施行されたが、増加する軍人遺族対策の機能を強め、保健所による保育指導は「産めよ増やせよ」政策を支え、戦争遂行体制の一環に組み込まれてゆくことになる。

一九三八年四月、政府は労働力不足を女性で補うべく戦時動員をはかる。人的資源・物的資源を総動員することを目的とした国家総動員法を発令し、職場・地域・学校別に女性を含めた勤労報国隊を

結成させた。女性にはさらに、人口増加政策が次々と図られ、早婚多産の奨励、傷痍軍人の妻になること、満州開拓移民の青年の妻になること等が奨励された。一九四〇（昭和一五）年五月、国民優生法が公布され、「不健全素質者」に対しては、「優生手術」により生殖不能にすることを可能とし、他方、「健全者」の増加を図られた。一九四一年一月、政府は「人口政策確立要綱」を閣議決定し、結婚の早期化と出産奨励策を決定する。厚生省は同年、「多産報国思想」の指導を主張し、一〇人以上の子供をもつ家庭を「優良多子家庭」として大臣表彰することを決定した。これは「軍国の母」賛美の風潮を盛り上げることになった。同年、国民優生連盟が発表した「結婚十訓」の「産めよ育てよ国の為」という一条は、「産めよ増やせよ国の為」という有名な標語を生み出す。そのための具体的施策として、出征兵士の結婚のための一時帰国の許可なども実施される。一九四二（昭和一七）年五月には、〈子宝報国〉ということばが登場し、厚生省が結婚資金を貸し出すことになる。

以上のように戦時下女性政策は、男性の出征による労働力不足を女性によって補う一方、戦争遂行のための人口増加を目的とし、本来私的領域である結婚・妊娠・出産を国家が調節しようとして、その要となるのが〈母性〉であったといわれる。一九四二年五月には、内閣情報局の指導下に結成された文学者・学者の社団法人「日本文学報国会」は、読売新聞社と提携して、無名の母を一道三府四三県および樺太の全国津々浦々に尋ねて、「日本の母」として顕彰する運動を展開した<sup>4)</sup>。戦争遂行に兵士が不可欠であるなら、兵士を産む母、育てる母、銃後の護りとしての母は、総力戦体制の要となった。〈母性〉奨励は、必然性をもって生み出された国策の一環であり、

人々の内面に深く根を下ろしたのである。

本稿で取り上げる『築地河岸』（一九三七年九月）『二人いるとき』（一九三八年一月）は、一九三七年一月、若い女性を対象として創刊された『新女苑』に発表された。同誌において百合子は「読書の頁」も担当しているが、この欄に関わる問題については、入江寿賀子『「新女苑」考——一九三七年から四五年まで——』<sup>(5)</sup>に詳しい。また、小平麻衣子「教養の再編と『新女苑』——川端康成の投稿指導にふれて——」<sup>(6)</sup>では、この雑誌は創刊時、読者に職業に就くことを奨励し、職業と結婚の両立などの記事も多かったが、やがて人口増加の国策に沿って路線を変更せざるをえなかったと指摘されている。労働力不足を補うための職業進出の奨励と多産の奨励という女性に対する矛盾した二向性は、いずれも国策に沿っているといえよう。両小説が発表されたのは一九三七年七月の日中戦争開戦直後であり、中村幸「人口政策の諸相——結婚報告をめぐって——」<sup>(7)</sup>には、「支那事変後は、（略）人口は一層増殖すべしとの思想が支配し、『産めよ殖えよ』の宣伝が政府に依って叫ばれ民間もこれに和した」とある。まだ〈子宝報国〉ということばこそ出ていなかったが、出産を中核に据えて女性に戦争協力を促す政策が遂行されていたなか、二小説にはそうした国策に対してどのような抵抗が込められていたのだろうか。

## 二 『築地河岸』

『築地河岸』の梗概からみていきたい。

主人公河田道子は、夫啓三が二年前に収監されてから、医療機械雑誌の編集事務をしながら一人で暮らしている。小説は、道子が監

獄の啓三に面会に行った帰途から始まる。街には戦時色が溢れている。乳飲み子を背負いながら千人針を頼むおかみさんたち。省線のなかでは、知り合いに禁足命令が来たので自分たちの召集もなかろうと話し合う二人連れなど。新橋駅にある事務所に戻った道子は、午後一時半からの関係者の定期集会の準備をする。経営の逼迫してきた雑誌刊行をどうするかが議論され、ようやく雑誌の続刊が決まったのは六時近くだった。疲れ切った道子だが、義兄信一との約束の会食に駆け付ける。信一の用むきは、啓三の留守の間故郷の田舎から河田の両親を東京に呼び迎えて一緒に暮してはどうかという提案だったが、道子はきっぱりと断る。

このような内容をもつ『築地河岸』には、次のようないくつかのテキストがある。

① 初出誌 『新女苑』一九三七（昭和一二）年九月

② 初収録単行本 『三月の第四日曜』金星堂、一九四〇（昭和二五）年一二月

③ 再収録単行本 『おもかげ』新星社、一九四三（昭和一八）年三月

④ 初収録全集 『宮本百合子全集 第五卷』河出書房、一九五一年（昭和二六）年五月

⑤ 再収録全集 『宮本百合子全集 第五卷』新日本出版社、一九七九（昭和五四）年一二月

④は戦後百合子が没した直後に刊行された初の全集である。この他にも収録している選集や単行本はあるのだが、本稿がテキストと

している⑤は、④を底本とし、②他を参照しているとあるので、この五冊に注目したい。細かい表現上の差異は不問に付すとして、字体と仮名遣いの違いはあるが、②③④⑤は同様の内容である。微妙な差異でありながら本質的な問題を孕んでいると思われるのは、①と②③④⑤との差異であり、戦争に関わる箇所である。従って、以下は主として①と⑤を比較したい（なお、①の旧字体は新字体に改める）。

まず、日中戦争開戦の一九三七年七月からさらに盛んとなった家族の無事を祈る銃後の女たちによる千人針の風景を活写した場面の「セイラア服」の女学生の会話からみてみたい。

### ①初出誌

「困っちゃつたわねえ」

「あのひと覚えてやしないわよ、だから嘘ついてことはと  
思はれちやふわ——やだなあ」

ピケの白い帽子をおかつぱの頭からぬぎながら、いかにも当惑さうにむかふを眺めてゐる視線の先は駅の入口で、そこには乳呑子を背負つた二人の中年のおかみさんが、必死の面持で通行人をつかまへては、鬱金木綿に赤糸で千人針をたのんでゐるのであつた。

「二人だつておんなじ人が縫つたら駄目になつちやうだつてもの——」

その女学生たちは、ゆきと同じ処でそのおかみさんの千人針を縫つてやつたものらしい。帰りに同じひとがまだゐる。又たのまれたら二度一人が縫ふことになるし、断れば信じまいと、

真面目にこまつて評議してゐるのであつた。北支が騒がしくなつてからこのかた、市中の出入の多いところは到るところで千人針がさがれていた。（傍線部引用者、以下同じ）

初出傍線部「北支が騒がしくなつてからこのかた」は、⑤では、「七月このかた」と直され、日中戦争を指す明らかな表現が無くなつてゐる。

道子も千人針を頼まれ、「御主人なんですか？」と聞く場面では、初出では、「え、さうなんですよ、あなた。子供が三人もあるのにねえ」と「真岡の袂で涙と汗とで上気せあがつてゐる顔をふきながら」礼を言うところ。⑤では、「ええ、そうなんですよ、あなた。子供が三人いるんですよ」「真岡の袂でのほせあがつてゐる顔をふきながら」と変化している。初出の「子供が三人もあるのにねえ」という台詞のほうが、明らかに夫の出征に対する不安と苦衷が伝わるし、「涙と汗」を流しながら千人針を頼んでいる悲壮さと必死さの表現が、⑤では削除されている。

次に、千人針の害について述べている箇所をみてみよう。

### ①初出誌

道子の働いてゐる医療機械関係の雑誌社の用で、或外科の大家を訪問したとき、時節柄千人針の話が出た。千人針を体につけてゐる弾丸に当たると、<sup>A</sup>弾丸はぬくことが出来ても、こまかい糸の結び目と布とが傷の内部にくひこんでのこつて危険だといふことであつた。人間の腕力だけでふるはれた昔の素朴な武器にふさはしいさういふお守りを、今日もやつぱり縫つて、せ

めて身につけて行かせようとする<sup>B</sup>家族の生きてゐてほしい心持といふものが、道子に惻々と迫つて来て、心持だけのものとなつてゐるだけ一層切ない街上の風景なのである。

初出傍線部A「弾丸はぬくことが出来ても、こまかい糸の結び目と布とが傷の内部にくひこんでこのこつて危険」が、⑤では、「弾丸はぬくことが出来ても、こまかい糸の結び目と布とが傷の内部にこいで危険」と変化している。すなわち、初出の「くひこんでこのこつて危険」とある「このこつて」という箇所が削除され、「こまかい糸の結び目と布」とが体の内部に残る危険性が薄められている。家族の無事を祈る銃後の女たちの思いを込めた千人針が、かえつて兵士を傷つけることになるという秘密裡にされている情報を、初出の方が、より正確に知らしめているといえよう。また、傍線部B「家族の生きてゐてほしい心持」は、⑤では、「家族の心持」と変化しており、「生きてゐてほしい」という箇所が削除されている。国のために死ぬことを誉と賞揚した時代ではあるが、表現の不自由さは戦局が泥沼化するに従つて徐々にいや勝つていったと推察される。千人針は、「生きてゐてほしい」という家族の切なる願いから銃後の女性によつて実践され、一九三九（昭和一四）年には、松屋デパートで、「戦線と銃後をむすぶ千人針セット」が発売されたという。虎の絵を印刷したさらし木綿と赤い糸、針のセットで三八銭だったそうである。時代は少し遡るが、物理学者・随筆家・俳人の寺田寅彦による「千人針」<sup>9)</sup>という随筆が、満州事変勃発後の一九三二（昭和七）年四月に発表されている。「如何にも兵隊さんの細君らしい人などが赤ん坊を負ぶっているのに針を通してやっている人が

やはりおなじ階級らしいおばさんや娘さんらしい人であつたりすると実に物事が自然で着実でどうにも悪い心持のしようがない。そうした事柄が如何にも純粹に日本的だという気がするのである。迷信だと云つてけなす人もあるが、たとえ迷信だとしてもこれらはよほどたちのいい迷信である。」と、千人針を肯定している。高名な物理学者の随筆だけに影響力は大きかつたに違いない。

こうした風景のなかで道子は、過日銀座で、出征する若者に乗せたバスから女車掌が日の丸の小旗を振りかざしてパンサーイと叫んでいた光景を思い出す。

#### ①初出誌

（略）紅をぬつた口々に声を限りパンサーイと舗道の群衆の流れに向つて叫んで行く婦人車掌の間に挟まれて、軍服を着た若者が、手の小旗を振らうともせず、騒ぎに包まれてほんやり無意味な善良な微笑をた、へて立つてゐる姿が目を掠めた。（略）ほんやりした微笑をこりかたまらしてゐた若者の全く受け身な顔を道子は容易に忘れることが出来ないのである。

出征する若者の描写の初出傍線部「若者の全く受け身な顔」は、⑤では、「若者の顔」と直されており、「全く受け身な」が削除されている。お国の役に立つことを本来なら名譽として勇んで出征に臨むべきなのに、初出の「全く受け身」で「ほんやり無意味な善良な微笑をた、へ」るしかない若者の姿の描写からは、前途への不安に包まれた内面がリアルに照らし出されている。なお、バスの車掌が女性であることも、この時代をよく表徴していよう。

また、電車の中で二人づれの会話もみてみよう。

### ① 初出誌

「小田んところへ禁足命令が来たつてぢやないか。A 僕らもそろくあぶないもんだぜ」

「出るとなりや、B ○○○○を買はなけりやならないんだぜ、C やりきれないなあ」

初出傍線部Bからみていきたい。②③では同じく「○○○○」と伏字のままだが、戦後の初全集④で初めて「ピストル」と明記された。一般兵士は軍装品を支給されたが、将校クラスは軍装品を全部自分で用意しなければならなかったそうである。そうであるなら、ピストル購入を話題にするこの二人は職業軍人ということになる。傍線部A「僕らもそろくあぶないもんだぜ」は、②③では、「そろそろ僕らの順だぜ」に直されている。職業軍人でありながら出征することを「あぶない」と表現していたのに対し、「僕らの順だぜ」と戦地へ行くのを当然とする表現に変えられている。さらに、傍線部C「やりきれないなあ」は、②③では、「一体どの位するもんだい」に変えられ、「やりきれない」という嘆息が、購入に前向きな姿勢に変化しているのである。初出中唯一伏字になっている箇所は、二人連れの正体を明らかにすることが憚られたゆえの伏字であったと推測できるのではないだろうか。

こうした変化を見ると、初出ではよく検閲を免れたと思われる千人針の害に関する表現など、戦火が厳しくなっていた②③では、表現を不鮮明にせざるを得なかったのだろう。④は百合子没後のな

で、編集者が単に、百合子生前の単行本を底本としたのではないかと思われる。現在流布している⑤の全集でも、千人針の危険性に対する指摘、出征する若者の戸惑いなど、十分に明確な反戦表現と捉えられる。しかし、初出を確認すると、戦争に対する銃後の女たちの困惑や抵抗感、千人針のさらなる危険性、出征しなければならぬ若者の不安、さらには職業軍人でさえ出征に消極的であるなど、より強い反戦表現の書き込まれていたことが明らかである。

以上は、直接的な反戦表現といえる。『築地河岸』には、この他に規範的女性像から逸脱している主人公が描かれており、それらは間接的な反戦表現となっている。小説の冒頭は、道子が収監されている夫との面会から帰る場面が始まる。夫が一般的な犯罪者であらうことは、投獄されているのではなく、おそらく非国民たる政治犯であらうことは、「啓三の人物のこだわりなさ」とか「啓三への愛着の高まる気持」などの表現を通して窺われる道子の夫への信頼感や深い愛情から読み取ることができるといえる。非国民である夫を敬愛する道子は反時代的であるうえに、夫を収監されているため人口増加政策にも貢献できない。戦時下小説で、こうした女性を主人公にしている点こそ注目に値しよう。

道子が職場に戻った場面では、医療機械雑誌刊行の経営が逼迫しており、事業を縮小するか、逆に積極政策でのり出すかが決定される重要な会議が開かれる。道子が会計報告をみると、「人件費が案外かかっている」という意見が出され、道子は「覚えず呼吸が速くなる。雑誌の編集全部をやって広告取りまでして、道子の月給は「五十円」である。一人で切りまわしていた事務所に、二カ月前に千鶴子を「二十五円」で雇い入れた時、常任幹事が「半分本気」で

「文化学院あたりの卒業生かなんかなら、手弁当でもいいっていうのが相当いるんだらう。一つそういうのをめつける位の手腕があつて然るべきだね」と言うのを、タイプが打てるからと頑張つて承知させたのである。鈴木正和「築地河岸」『鏡の中の月』論——戦争と女の拒否する言説——により、当時の銀行員の初任給は七〇円、公務員は七五円であることが明らかにされている。道子と千鶴子の二人合わせて、公務員一人分の給与であり、まさに低コストで雇われていることがわかる。

この会議に先立つ場面で、道子の留守中に尋ねてきた人物に関する千鶴子との会話は、道子の労働がいかに厳しいかを裏付けている。千鶴子は臙膺臙髭をつけた会計の豊岡だと告げるが、道子は豊岡にはそんな髭がないと言下に否定する。ところが、再度その男性がやってくると、それは豊岡であり、まさに大きな臙膺臙髭がついているのではないか。道子は、この二年間、千鶴子が入るまでは一人で万事を負つて働いていて、いつも会う豊岡に髭がついていることさえ気づかないほど仕事に忙殺されていたことを痛感するのであった。昭和に入って職業婦人は増加し、日中戦争が始まるとさらに労働力不足を低コストの女性で補う時代に入り、女性労働に対する差別的な扱いが公然とまかり通つていたのである。

加えて、自立を難しくさせる嫁としての性役割も描かれている。定期集会で疲労困憊の道子だったが、夫の兄の信一との会食に駆け付ける。信一の用むきは、啓三の留守の間故郷の田舎から河田の両親を呼び迎えて一緒に暮したらどうかという提案だった。「型にはまった男の気持」から、弟の妻までを「所謂留守を守る妻」として暮らさせたがり、あわよくば自分の家庭に引き取らなければならな

い老父母まで弟嫁にまかせたらと考えている兄夫婦の魂胆を見抜いた道子は、きっぱりと断るのであった。

しかし、嫁としての性役割に無理解なのは、実は義兄だけではない。道子が義兄と比べて信頼し評価する夫も、次のような手紙を寄こしているのである。

「朝も手だすけして貰えるし、つかれてかえればちゃんと食事の仕度も母がして待っていてくれるようだったら、君も疲れないですむだろうし、時間も出来てきつと勉強に好都合だと思いがどうだろう」

それに対し、道子は、次のように思うのである。

啓三の人物のこだわりなきがこの文面に滲み出している。そう思うとともに、妻である道子の感情には、おのずから啓三がそこに描いているとは違った内容を直感させる嫁としての現実が映つて来るのであった。現在の日本の家庭で、その家の娘であるということと嫁であるということの間には、決して同じでないものがある。しかもそのことをはっきりと実感としているのが女だけだということは、何と**いう気まずさや不便やけちくさいような困却があること**だろう。道子にしる、啓三にその気持だけとり立てては云えまい。

嫁という立場では、舅姑とは啓三が考えるような安楽な関係性を保てるはずがなく、嫁という性役割を自ずから要求されることを実

感しているのは女だけであることを指摘している。これは、戦前の家制度が嫁に課した性役割であると同時に、今日にまで続くジェンダーの問題でもある。道子の信頼する啓三でさえ「嫁としての現実」への理解がなく、あたかも「その家の娘」でもあるかのような単純な捉え方しかしていないことは驚くほどの鈍感さである。

しかし、翻って考えると、啓三には他にも問題があるかもしれない。義兄と同じく「型にはまった男の気持」から「所謂留守を守る妻」として暮らさせたがっている面がないとは言えないのではないだろうか。だが道子は、その点では啓三の気持ちを徹塵も疑うことなく、<sup>12</sup> 決然と義兄に断り、「兄夫婦のこせついた生き方を考えると、そういう打算を知らない心で、家族の者に善意だけを向けて考えられない境遇におかれている良人の啓三が、道子に一層いとしく思われる」ところで小説は閉じられる。

先に指摘した直接的な反戦表現とは一見異なるようにみえる職場での性差別批判や嫁の性役割否定などだが、それらと闘いながら獄中の夫を支える道子の生き方そのものが、国策を遵守する規範的女性像から逸脱しており、間接的に反戦に繋がる本質をもっているといえるだろう。

### 三 「二人いるとき」

続いて、「二人いるとき」の梗概をみてみよう。

洋服の仕立てをしている原多喜子は、流産の経験があるにも拘わらず、再度妊娠した現在も仕事を続けている。夫参吉は、ある私立大学の講師をしている。夫婦は、いつ召集されるかわからない状況のなかで、「随分いろいろ話し合うようになった」。多喜子とともに

洋裁の仕事をする仲間叫好子と小枝子がいる。既婚者である好子も、戦死するかもしれない夫とのあいだに「何か確りしかしたもの」を感じたいと願っている。独身の小枝子は自動車会社の事務員だが、技術を身につけて確実に自立できることをめざして洋裁を始めた女性である。このように多喜子の生き方を中心に、戦時下の夫婦のあり方や女性の自立的な生き方が描かれている。なお、初出誌と現全集との差異はない。<sup>13</sup>

表題になっている二人揃っている時の夫婦のあり方について、多喜子夫婦・好子夫婦とは対照的な尚子と幸治夫婦の問題からみていこう。多喜子は、洋服の仕立てを頼まれた女学校時代の友人桃子の兄嫁尚子の家に仮縫いに行く。そこで尚子の夫は多喜子に、他ならない結婚を記念する晩に、わざわざ妻に不貞の妻の役割をさせ、自分も不貞の良人を演じて食事をしたことを得意げに話す。それに対して、多喜子は次のような感慨をもつ。

この頃はいつ召集があるかもしれないような事情のなかで、自分たちが本気でそれを守り高めようとして暮している夫婦生活の平凡な真面目さが、何かに嘲弄されているような嫌な気もするのであった。

作品内時間が日中戦争開戦直後であることは、多喜子夫婦が、日比谷で「第七天国」という映画を観る場面からわかる。この映画は二度製作され、日本でも二度公開されているが、「シモーヌ・シモンがディアンヌという裏町の娘に扮し、ジェームス・スチュアートが道路掃除夫のチャーコになっている」というキャストからすると一



九三七年版であり、日本では一九三七年一月に公開されているからである。

尚子の夫は、「増田の父親の経営している会社の子会社へ、若専務として幸治はオースティンで通っている」とあり、イギリスのブランド自動車であるオースチンを乗り廻すブチ・ブルジオアの典型のような人物であろう。多喜子は、「ああいう日暮しの人々の結婚生活というものかげに潜んでいる非常に恐ろしい、唾棄するようなものが、尚子にも気附かれずのぞき出しているのを感じ」るのであった。多喜子が尚子夫婦の生活ぶりをこれほど嫌悪するのは、日中開戦以来、夫が何時召集されるかわからない時代であるからこそである。このような兄夫婦と暮らしている桃子にたいして多喜子は、「音楽も抜群であるし、絵をかかせればやはり目をひくだけの才気を示し、人の心の動きを理解する力も平凡ではないのに、桃子にはとことんの処へ行くとすらっと流れてしまうものがあつた。一本気なところのなさが、桃子のいろいろの才能をも、つまりはちゃんと実らせない原因のようである」し、「そのことをもやっぱり桃子の毎日の境遇ときりはなして見ることは出来ない」と思うのであつた。多喜子は、未婚の女性である桃子の中途半端な生き方にも疑問を持っており、自立をめざす仕事仲間の小夜子の生き方とは対照的に位置づけられている。

多喜子は洋裁仲間の好子に向かつて、「私たちこの頃、また随分いろいろ話し合うようになったわ。昔左翼の人でね、夫婦の間で決して翌日まで喧嘩をもちこさない約束で暮しているひとがいたつて、その気持やつと今わかるようだわ」と話す。いうまでもなく左翼は何時特高に逮捕されるかわからないからで、戦地への突然の召集と

同様だからである。好子も、「山田は時々戦死するかもしれないよと云うのよ。そんなとき、私、それはそうねと云つて、それでもやっぱり何か確しかりしたものを夫婦の間に感じて落着いていられるようになりたいと思うわ」と話す。両夫婦は、尚子夫婦とは異なり、戦時下の夫婦生活を「平凡な真面目さ」で「守り高めよう」としているのである。

好子が洋裁をやり始めたのも、「やはり勝たずば生きてかえらじという歌を流行歌のようにはきいていられないものがあつてのこと」だからであり、多喜子に「好子さん、あなた、詩人に注文がない？」と問われると次のように答える。

「私あるわ。もつと本当に私たちが大事なものを出してやる心持をうたつた歌が欲しいわ。勇ましく戦つてくれ、そして、成ろうことなら生きて還つてくれ。どんなにこの心は強いでしょう。そして皆の願ほんいが、そうなのだと思うわ。そういう真個に情のあふれた落着いて勇ましい励ほんましの歌が欲しいわねえ」

「本当に私たちが大事なもの」とは夫のことであり、「出してやる心持」とは妻の心持である。妻として一番言いたいのは、「成ろうことなら生きて還つてくれ」という思いであり、この思いこそ「皆の願ほんい」なのである。しかし、それだけを言うことは憚られる時代であるため、その前に「勇ましく戦つてくれ」を止む無く付けているのだろう。

多喜子の夫参吉は、ある私立大学の講師をしている傍ら、近代英文学の社会観とフランス文学のそれとの比較をテーマに研究してい

るのであった。多喜子の女学校時代に文明史を教えていた戸田という教師は、イタリーへ交換教授として行くことになり送別会が催される。日独伊と米英仏との間に起こった第二次世界大戦が勃発するのは一九三九（昭和一四）年九月だが、作品内時間はいわば大戦前夜である。教え子から「凡庸」と思われていた戸田の行動は時局に即したものであり、それに反して、参吉の研究の反時代的専門性は、きわめて注目値するだろう。多喜子は「この頃あのひと一生懸命だわ、呼ばれないうちにせめて今やっている分だけでもまとめたいって」と夫の研究に理解を示して支持し、「落ち着かないわねえ。何万人もが私たちみたいな心持でいるんだと思うと、夜中に目が醒めた時なんかとても変な気がする」と、夫が何時召集されるかわからない妻の不安を漏らす。

こういう気持で生活している多喜子は二度目の妊娠をしている。一度目は流産をしており、「今度は自信がある」と言っているが、多喜子の行動は、はなはだ不用心である。小説冒頭の尚子の仮縫いに行った場面では、「床柱も、その一輪差しに活けられている黄菊の花弁の冷たささえ頬に感じられて来るような室の底冷える空気が」の火のない部屋で待たされている。帰宅した後、好子や小夜子と洋裁をしている場面では、多喜子がミシンを踏みかけると、小夜子が止める。去年初めて妊娠した時、「自分の健康に自信をもちすぎている、テニスをしったり自転車にのったりしたため流産した」とを思い、案じたからである。多喜子は女同士の「温い心づかい」を感じて「却って言葉がつま」るのであった。最後の場面では、戸田の送別会の後、午後五時に日々谷で参吉と待ち合わせ、先にふれた「第七天国」を観に行き、夜道を帰宅する。参吉は、「——なる

だけ俺がよばれないうちにうんじゃえよ、ね」といい、燈火管制のために暗い夜道を歩く多喜子を気遣い、足元を懐中電燈で照らしてやるのだった。

再度の妊娠をしている多喜子は、ある意味では時代に応えることになるが、出産に対する心構えはどうだろうか。流産の経験があるにも拘わらず、作品冒頭の底冷えのする場面や、洋裁の仕事への取り組み姿勢、夕方からの映画鑑賞と夜道の帰宅など、国家政策に込める意識は皆無であり、むしろ軽視しているとさえ思われる。そうではないにせよ、「産めよ増やせよ」の時代であるだけに、出産に関する情報は充溢していた。にも拘わらず多喜子のこの姿勢は、明らかに反時代的といえるのではないだろうか。

なお、「第七天国」ともうひとつの映画を観た多喜子は、参吉に「何だか古くさいわね」というと、参吉は「変な工合に時代の空気を反映しているみたいな作品だな」という。酷評された「第七天国」は次のような内容である。下水道掃除夫から道路掃除夫になることが夢だったチコは、虐げられていたディアースを屋根裏部屋の自宅に匿い、やがて二人は恋に落ち結婚する。第一次世界大戦が勃発して、チコは徴集されて出征し、失明して還ってくるが、ディアースは、一生彼の目の代わりになることを決意するのであった。このように恋愛と戦争を絡めた映画であり国策に合致した内容だが、戦争の酷さを否定しないで愛の問題にすり替えてしまう点を、多喜子と参吉は「古くさく」「時代の空気を反映している」という表現で批判したのだろう。

以上のように、「二人いるとき」は、夫の召集を恐れる本音を声高には言えない時代に、妻の本音を描き、それ故にっそう二人いる

ときは、「平凡な真面目さ」を「守り高めよう」と務める夫婦のありかたを描き出している。しかし、そうした不安を抱えながらも多喜子は、出産だけを目的とする生活をめざそうとはせず、仕事を続けるのであり、こうした生き方は、反時代的であり反戦に繋がるものといえよう。

### おわりに

『築地河岸』と『二人いるとき』は、千人針の危険性、戦争に行くことへの男たちの不安、夫の召集を恐れる妻たちの気持をあらかじめ書くことと自身が反戦に繋がる時代に、それらを明晰に描き出した小説である。同時に、戦時下女性政策を視野に入れて読むと、当時としては異端的な既婚女性たちを描いていることがわかる。〈母性〉奨揚の時代にあつて、道子のように夫が収監されていて〈子宝報国〉に報いられない女性や、多喜子のように流産経験者でありながら再度の妊娠に対して充分な心構えをしない女性を描くこともタブーであつたに相違ない。二人とも時代に反した生き方の夫をもつ仕事をする女性であり、出産を妻の性役割の第一義とする時代の規範に反した妻たちだからである。

先述の拙稿「宮本百合子『鏡の中の月』『雪の後』『播州平野』——戦争ファシズムと女性」では、戦時下作品の『鏡の中の月』『雪の後』によって未婚女性に対し〈結婚報国〉に巻き込まれないようにというメッセージを発し、戦後は「播州平野」で〈結婚報国〉が結果した女性たちの本質的な不幸を描出することで、戦争ファシズムへの抵抗を表現していることを検証した。『築地河岸』『二人いるとき』は、すでに結婚している女性たちを通して、妻・嫁の性役割

を脱し、〈結婚〉が〈報国〉にならないような妻の自立的な生き方を描く一方、夫が召集されることを恐れる妻の気持や、出征しても「生きて還つて」ほしいという卒直な願いを、可能なかぎり表現することをめざしており、それらは既婚女性への確実な反戦メッセージになっていると思われる。

注(1) 新日本出版社版全集・別冊(一九八一・一二)所収の年譜によると、

一九三七(昭和一二)年一〇月一七日の顕治の誕生日を記念して、筆名を中條百合子から宮本百合子へ改めることにし、九月二日執筆の「夜叉のなげき」(『あらくれ』一月号掲載)から実行したとある。従つて、『築地河岸』初出の署名は中條、『二人いるとき』初出の署名は宮本となっている。

(2) 岡野幸江・長谷川啓編『戦争の記憶と女たちの反戦表現』(ゆまに書房、二〇一五・二)所収

(3) 若桑みどり『戦争がつくる女性像』(筑摩書房、一九九五・九)、阿部恒久・佐藤能丸『通史と資料 日本近現代女性史』(芙蓉書房出版、二〇〇〇・一二)他を参照。

(4) 全国で四九名の「日本の母」を決定し、文学報国会の会員である大佛次郎・尾崎一雄・川端康成・高村光太郎・壺井栄など当代一流の文学者が訪問記を書き、一九四二年九月九日から一〇月三二日まで『読売新聞』に連載(のち、日本文学報国会編『日本の母』春陽堂書店、一九四三・四)し、「日本の母」鑽仰運動は大きな盛り上がりを見た。詳しくは、拙稿「戦時下の「母性」幻想——総力戦体制の要」(岡野幸江・北田幸恵・長谷川啓・渡邊澄子編『女たちの戦争責任』東京堂出版、二〇〇四・九)を参照されたい。

(5) 近代女性文化史研究会編『戦争と女性雑誌——一九三二年〜一九四五

年——(下メス出版、二〇〇一・五)所収。百合子は「読書の頁」を一九三八年一月、一九四〇年六月から二月まで担当しているが、この欄は一九三八年二月から一月まで中止となっている。百合子が内務省警保局の執筆禁止者リストに上がったためという。「新女苑」の愛読者はこの中断にすぐ反応し、「大事な所をとられた様です」などの声を寄せたという。

(6) 『日本近代文学』第90集、二〇一四・五

(7) 注5の『戦争と女性雑誌——一九三二年〜一九四五年——』所収。

(8) 小原解子・柁屋洋子・岡澤あやこ編『戦争とくらしの事典(ポプラ社、二〇〇八・三)』

(9) 『セルパン』掲載。署名「吉村冬彦」。引用は、『寺田寅彦全集 第七巻』(岩波書店、一九九七・六)に拠る。

(10) 注(5)の『戦争と女性雑誌——一九三一年〜一九四五年——』所収の三鬼浩子「戦時下の女性雑誌——一九三七〜四三年の出版状況と団体機関誌を中心に——」に拠ると、雑誌発行を取り巻く状況は次のようである。

日中の全面戦争突入後、(略)情報委員会が同年九月二十五日に情報部、四〇年二月に内閣情報局へと拡大強化され、雑誌発行は強力な指導・監視下に置かれた。そのうえ、発禁を恐れる出版業者の希望もあつて、三七年八月から雑誌出版前の「内閲」が行われるようになった。

従って『築地河岸』中唯一の伏字も、この「内閲」によるものであろう。

(11) 岩淵宏子・北田幸恵・沼沢和子編『宮本百合子の時空』所収、翰林書房、二〇〇一・六

(12) 百合子は顕治が投獄されて以来、彼の面影を投影させた人物に対しては全肯定に近い描き方しかしていない。夫恋しの思いが溢れており、「自分の病氣」と呼んでいたという(河出書房版『宮本百合子全集 第五巻』宮本顕治解説、一九五一・五)。この場合も、同じ側面がみられよう。

なお、主人公の一人暮らし描出には、顕治の収監中の百合子が、一九三七年一月から一九四一年八月までの四年七ヶ月の間、林町の弟一家のブルジョア的な生活から離れ、目白に小さな二階家を借りて住み、西日の射す二階の六畳で仕事をしてきた体験が反映されているかもしれない。(13) 『二人いるとき』は、のち『宮本百合子全集』第五巻(河出書房、一九五一・五)収録。新日本出版社版全集は、河出書房版を底本とし、初出誌を参照したとある。

〔付記〕『築地河岸』『二人いるとき』よりの本文引用は、新日本出版社版『宮本百合子全集』第五巻(一九七九・二二)に拠る。